史料室だより No. 88 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2017年5月17日

「村岡花子記念講座」事始

東洋英和女学院大学　学長　池田　明史

講座開設　発案の経緯

東洋英和女学院の誇るべき先達、村岡花子女史を主人公とした連続テレビ小説「花子とアン」の放映が始まったのは2014年の春であった。学長就任早々だったので、少しでも学院の歴史に馴染もうと視聴を欠かさずにいたところ、やがてある想いが心中に去来することとなった。中高部と比較すれば遥かに歴史が浅く、また学生の大多数は外部から受験して入学してくるという事情とも相俟って、大学においては建学理念の「敬神奉仕」を如何にして個々の学生諸君の内面に定着させられるのか、という大きな課題を抱えていた。経文のようにただ唱えていれば身に付くというものでは決してないし、現今の学生の性向を考慮すれば、強制的に礼拝に動員して説教を聞かせていれば理解されるといったものでもなかったからである。そのような一方通行的なやり方では、言葉も理念も発すれば発するほど意味や価値が減衰していく。言葉のインフレは、その言葉に表象される本来の価値の希薄化・形骸化をもたらすのである。

村岡花子記念講座　開設企画セミナー　ちらし

求められるのは、「敬神奉仕」というスクールモットーの四文字が、いわば人格化された具体的存在、すなわち「ロールモデル」にほかならない。どこかにそんな材料が転がっていないものか。漠然とそうしたことを潜思していたときに「花子とアン」が始まった。

英和大学生のロールモデルは？

不肖にしてこのドラマを見るまでは、村岡花子なる人物の詳細も知らず、その「腹心の友」柳原白蓮に至っては「戦前のスキャンダラスな上流婦人」程度の認識しかなかった。英和に禄を食むわれわれの間でも「知る人ぞ知る」存在だったのである。それだけに、ドラマに触発されて記録に残る彼女らの歴史的実像に触れ、さまざまな資料からその生き方を検証してみて、学生のロールモデルとして最適ではないかと確信するに至った。当時の英和において時代に屹立する知性を涵養し、その基軸の上に主体的に生き、自他共生の実を挙げた女性たち。とりわけその象徴的存在であった村岡花子については、多様な視角からの接近が可能だという利点もあった。なにしろ、翻訳家・児童文学者・歌人・教育者・編集者・放送作家・社会活動家等々といった多彩な顔を持つ人物である。人間科学・保育こども・国際社会・国際コミュニケーションという四つの学科に包摂される本学の学生の誰にとっても、それぞれがどこかで接点を持てるロールモデルとして位置づけられるはずだと思えた。

以上が、ドラマの放映時に偶々池田が学長職にあったという偶然の所産として、村岡花子の名を冠した自校史と女性学の融合講座を開設できないかとの着想に至った経緯である。

花子特別奨学生制度の発足

さらに人間科学部人間科学科からは、「現代版の花子」育成計画なるものも上申されてきた。上流家庭子女に開かれていた東洋英和女学校のなかでは異例の出自を持つ花子が成業できたのは、寮に起居する給費奨学生制度があったればこそとの認識から、この顰（ひそみ）に倣うべく、新たな試みが提案されたのである。すなわち、あれこれの格差が拡がりつつある現代のわが国では、事実上の大学全入時代が到来したと喧伝される一方、経済的理由その他によって大学への進学がまったくオプションにないような状況に置かれている高校生も少なくない。英和が村岡花子を学生のロールモデルとするのであれば、花子がその制度によって掬い上げられたと同様の給費奨学生制度の導入をも射程に入れなければ平仄（ひょうそく）が合わない、という指摘であった。

関係者の間で「花子プロジェクト」と通称されるようになったこの計画の大枠は、養護施設等から高校に通う女子生徒に対し、その人格や性向、そして何よりも勉学継続への本人の熱意を吟味し、これはと思える者を選抜して学納金その他四年間の大学生活経費につきいわば学院が丸抱えで成業を支援するという構想である。もとより、こうした制度を実現させるには何よりも先立つものを手当てせねばならない。すでに冠講座（「村岡花子記念講座」）開設について相談していた当時の英和後援会の会長に、当該講座と連動させたこの花子特別奨学生制度のアイデアを持ち掛けたところ、即座に満腔の賛意を頂戴し、積極的に役員会の説得に動いていただいた。理事長、院長をはじめ法人側からも全面的なバックアップを取り付けることができ、花子プロジェクトは教学面でも財政的にも十分に担保されることとなった。実は、村岡花子氏は遺言状の中で著作３冊の印税を東洋英和の奨学金に充てるために寄贈する、と明記していた。印税は長年にわたり学院に寄贈されてきたが、今回初めてその真意が活かされることになった。さながら「オール英和」の様相を強めて、晴れて「村岡花子記念講座」とこれに連動した「花子特別奨学生」の新制度が産声を上げたのである。

開設企画セミナー（2016年度）報告

かくして2017年度より現行カリキュラムのフレッシュマンセミナー枠を活用した必修単位としての記念講座の開設に漕ぎ着けた。2019年度以降の新カリキュラムでは、この講座は独立した枠組みの上に立つことになる。いずれにせよ、記念講座の告知をかねて、大学では2016年10月半ばから2017年１月末にかけて５回にわたり、シンポジウムと講演によって構成される開設企画セミナーを実施した。「日本の近代化とキリスト教学校～女子教育の歴史にみる東洋英和～」を共通のテーマに掲げ、六本木校地の大学院大教室で行われたこのセミナーは毎回180名～100名の聴衆を集め、また2016年７月に締結された港区と東洋英和女学院との間の連携協定に基づいて東洋英和が企画し地域に公開した初の連携事業となった。各回のセミナー内容は概略以下の通りである。

第１回（10月15日）では「基督教と学校教育」と題して村上陽一郎前学長（ICU名誉教授・学院評議員）が、また加納孝代活水女子大学長（青山学院女子短期大学名誉教授）が「婦人宣教師と日本の女子教育」の題名でそれぞれ基調講演を行った後、池田も加わって現代日本におけるキリスト教女子高等教育のあり方をめぐってパネルディスカッションが持たれた。パネルを仕切ったのは英和高等部OGで「日経ビジネスアソシエ」誌の泉恵理子編集長である。

第２回（10月29日）の学院史料室嘱託の酒井ふみよ氏による「史料室所蔵資料にみる女学生の日常」は、貴重な写真等の視覚資料をふんだんに駆使した面白い試みとなり、東洋英和女学校の生誕当時から村岡花子の時代を経て、現在につながる英和の足跡が肌身で感じられた。史料室の存在意義が遺憾なく発揮された機会となった。

第３回（11月19日）の講演は、大学国際社会学部の与那覇恵子教授が村岡花子の同時代人である柳原白蓮と片山廣子とについて時代の文脈との関連で解説した「三人の女性から日本の近代を読む」。明治に生まれ大正、昭和を生きたこれら英和先達たちの時代性と近代性とを問う内容であった。

第４回（2017年１月21日）は池田が担当し、「ミッションスクールと帝国海軍」という、いわば埋もれた歴史を掘り起こす視点を提示した。

開設企画セミナー第５回
パネルディスカッション時の村岡恵理氏と池田明史学長

海軍将帥の妻子や係累といった人的ネットワークと英和をはじめとするミッションスクールとの意外な接点を紹介し、その意味を考える試みであった。

そしてセミナー最終の**第５回**（１月28日）は初回と同様にシンポジウム形式となった。「これからの社会とキリスト教学校」をテーマとして、東洋英和女学院の深町正信院長（青山学院名誉院長・和泉短期大学理事長）が「女子教育の社会的・宗教的意義」を語ったのち、「花子とアン」の原案者であり村岡花子の孫にあたる作家の村岡恵理氏が「宣教師から花子へ、そこに学びつつある心の妹たちへ」と題して、花子とその時代が現代に託した遺産についての考察を展開した。さらに、学院宗教部長でもある深井智朗人間科学部教授が、花子の訳した絵本を題材に、「キリスト教学校の作法とエートス」を論じた。これら三人の基調講演を受けて、村岡・深井両氏に池田も加わってパネルディスカッションが行われた。大学OGで日本テレビのアナウンサーとして活躍中の笹崎里菜氏がモデレーターを務めた。

自讃めくが、このセミナーはそれぞれの回が個性的で知的刺激に満ちたものでありつつ、それでいて全体に一貫したメッセージが読み取れる企画となったように思える。新年度より開設される「村岡花子記念講座」は、毎年５回程度を六本木校地で一般公開事業として展開する方向で設計しており、その意味でもセミナーの成功は講座の始動に向けて大きな弾みをつけるものとなった。

最後に、テレビドラマの終了に際して若干の感懐を大学チャペル週報に寄稿していたことを思い出したので、以下に再録して拙文を擱筆する。

「花子とアン」終わる　（大学チャペル週報No.2014-17）

半年間続いたNHKの連続テレビ小説「花子とアン」が今月で大団円を迎える。英和の卒業生がモデルだというので、ともかくお付き合いのつもりで見始めた。（中略）15分の間に起承転結をつけ、盛り上げたところで突然何かが起こってTo Be Continuedとなる現代版の読み継ぎ講談は、なるほど人を逸らさない。時代考証や歴史背景で「そんなはずないじゃん！」というところがないわけではないが、それでも筋書きの波瀾万丈が多少の齟齬など些事と思わせてしまう。このあたり、脚本家に人を得たというべきだろう。

実在の人物の生きた軌跡を大枠にしているとあって、前半では荒唐無稽な色恋沙汰が続いたものの、それらは必ずしも本筋ではあるまい。むしろ、時代に屹立した女性の自我を、そしてその生き方を、現代のわれわれに引き比べて突き付けている部分が色濃く滲み出た後半の展開こそ興趣に富む。とりわけ、戦争の足音が聞こえ始めた時期から、時代の大波にヒロインたちそれぞれがどのように立ち向かったかが丹念に描き分けられていたのには感心した。体制から睨まれながら反戦活動に身を投じる夫君を、文学的反逆心そのままに昂然として支え続ける白蓮と、彼女から「卑怯」と詰られてもギリギリまで「ラジオのおばさん」としての自己の職分を全うしようとし、受忍限度を越えたところで静かに身を引く花子と。

ドラマではいずれも「非国民」としての誹りを免れず、辛酸を嘗めることになる。しかし、この二人の時代への抵抗の姿勢は明らかに異なっていよう。

因みに、欧米の宣教師によって創設されたわが国のミッションスクールにとってこの時代は受難の日々であり、英和もその例に漏れない。東洋「永」和と改名を余儀なくさせられた事実が、その苦渋を物語っている。それは、どこか花子の抵抗と重なって見える。

学長　池田　明史

2017年度 村岡花子講座　予定

今年度の予定は下記の通り。六本木校地本部・大学院棟にて。参加申し込み等詳細は決定次第、生涯学習センターより発表予定です。

①10/14（土）梶原由佳氏（モンゴメリ研究者・トロント公共図書館勤務）
②10/28（土）同上
③11/18（土）深井智朗教授：生きる勇気―花子とバージニア・リー・バートン
④12/ 2（土）島　創平教授：開学の歴史的背景
⑤12/ 9（土）笹島　茂教授：東洋英和の英語教育―異文化間理解能力の育成

〈資料紹介〉30
『東洋英和女学院資料集　第４号・第５号 M. J. カートメル関係史料』

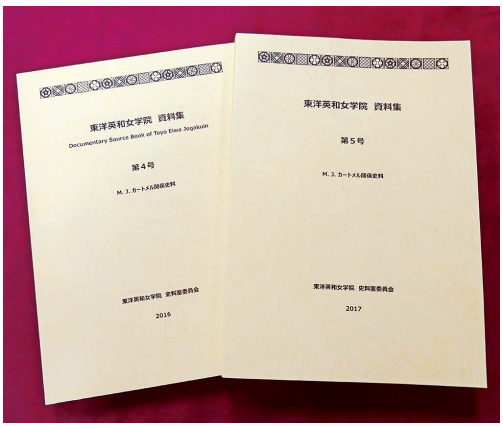
酒 井　ふみよ

史料室委員会では2016年３月に『東洋英和女学院資料集 第４号』（英語版）を、そして今年2017年３月に『第５号』（日本語版）を刊行できたので、担当者としてその紹介を行いたい。

刊行に至るまでの経過

『東洋英和女学院資料集』は、史料室委員会が1985年に『第１号』（ミス・カートメル関連）、1986年に『第２号』（ミセス・ラージ関連）、1987年に『第３号』（ミス・ブラックモア）を刊行したが、その後約30年刊行が途絶えていた。また、この『１～３号』は大半が英文であり、その翻訳は「敬和会」誌に1990年頃に掲載されたが、現在は一般に見ることができない状態であった。

『第４号』･『第５号』の計画は、2010年12月に、ミス・カートメルの親戚筋にあたるアンスティス・ブロムさんがカートメルの遺品、特に書簡などの書類をまとめて学院に寄贈してくださったことに始まる。学院創立者カートメルは長寿でいらしたので、収録資料の年代の幅は大きい。



『東洋英和女学院資料集　第４号・第５号』

カートメル直筆の回顧録や書簡、家族間の書簡などには、信仰の篤いカートメルの思い、こまやかな家族同士の思いやりが込められていた。目が不自由だった晩年の手書きの読み起しは一部クイズを解くようであったが読み解けた喜びが大きく、時間を作っては進めていた。そのうちに、これらはひとり東洋英和の創立者の話として保管するだけではなく多くの方に公開すべきであるし、カナダ人にも読んでもらいたい資料群であると確信するようになった。カナダでは教会の海外伝道について再考と反省が主流となっており、その恩恵を受けた東洋英和からの感謝があまり伝わっていないことを知ったためでもあった。そこで英語科の現・旧教職員、さらにちょうど結成されたばかりの40代の卒業生を中心とする「英和ネットワーク」にも声をかけて転記と翻訳を手伝っていただくことにした。同時に、『資料集第１号』が残部僅少となっていたので、それも合わせて創立130周年にあたる2014年度内には英文・和文合わせて資料集を発行する計画をたてた。

しかしその頃村岡花子ブームが起きて学院資料の需要が高まり内外からの照会が増えていたこと、史料室の目録整備が始められたこと、またカートメル関係資料を正しく理解するにはカナダ史やメソジスト教会の歴史に関する資料を読み込む必要があったこと、予想以上に日本語の先行研究が少なかったことなどが重なってさらに２年間の時が流れた。

編集にあたっては、説明を加えて読みやすさを心がけた。また、『第１号』～『第３号』はＡ５版でハンディだったが字が小さく混みすぎていて読みづらいことから、『第４号』『第５号』はＢ５版に拡大した。

『東洋英和女学院資料集　第５号』のおもな内容

口絵・カートメル略歴・家系図
第Ⅰ章　M. J. カートメル関係史料：ブロム夫人寄贈コレクション
ミス・カートメルによる回顧、書簡、覚え書き
ミス・カートメルが受け取った書簡
他の書簡 …… ①
会議報告書・スピーチ草稿 …… ②
小冊子：連合キリスト教女子大学設立促進委員会報告書 …… ③
デビッドソン・マクドナルド医学博士伝 …… ④
季節のご挨拶（「カナダ合同教会会報紙より」） …… ⑤
第Ⅱ章　東洋英和女学院資料集　第１号（翻訳） …… ⑥
「ミッショナリー・アウトルック」誌所収のM. J. カートメルの報告
バイブルウーマンの規則
ミス・カートメルの聖書の書き込み
第Ⅲ章　随想―M. J. カートメル（３編） …… ⑦
付　録　リスト（Ⅰ・Ⅱ章の資料の書誌情報） …… ⑧
人名索引・人物写真 …… ⑨
婦人ミッション関連概略年表 …… ⑩

『第５号』解　題

第Ⅰ章　①ブロム夫人寄贈コレクション

カートメルによる回顧、書簡、覚え書き／受け取った書簡／他の書簡

「麻布の学校」と呼ばれていた本校の開校の頃の様子がミス・カートメルによって回想されている他、創立25周年に寄せての祝辞など、創立者の生の声に触れることは大変興味深い。彼女の周辺の人びとの手紙も、当時のそれぞれの立場の様子を知らせてくれる。詳しくは「史料室だより」No.79（2012年11月）で紹介しているので今回は割愛したい。最近判明したのは、齋藤春子からのカードにはさまれていた齋藤實に関する新聞切り抜きが、二・二六事件の数か月前のものであるということだ。事件を知ったミス・カートメルが教え子の悲劇にどんなにか驚きと悲しみに暮れたであろうかと思いやられる。

②会議報告書・スピーチ草稿

大半が、カナダ・メソジスト教会が1925年に他の教派と合同してカナダ合同教会になる直前の婦人ミッションの集会の報告やスピーチ草稿と思われるものであった。集会において海外派遣の宣教師たちの帰国報告を聞く婦人たちは、献金をして送り出す側である。世界が激しく動く中で、彼女たちは異国に住む女性たちや若者たちに教育によって知識が得られること、神の福音が伝えられて魂の救いが得られることを願っていた。彼女たちの活動はまさに婦人運動そのものであり、その手腕は並々ならぬものであったことがうかがえる。婦人ミッション名誉会長のロス夫人やストラチャン夫人のスピーチを読むと、宣教師に負けず劣らずの堅い信仰に裏付けられたアピールに圧倒される。

なかでも、「WMSはクリスチャン女性たちからの、時間・思い・資金と彼女たち自身・その

娘たちからの愛の贈り物です」（p.98）というアピールは非常に印象的である。その発露として例えば、1933年ヴォーリズ校舎が立派に建築された際の総工費の約４分の３はカナダからの送金、すなわちカナダの婦人たちからの「愛の贈りもの」だったことを合わせて思い浮かべることができると思う。

③連合キリスト教女子大学設立促進委員会報告書（ブラックモア/クローソン作成）

東京女子大学が日本で初の女子の連合キリスト教大学として、プロテスタント各派が宗派を超えて協力してできた大学であることを知る人は、今は少ない。そこには東洋英和女学校も、ミス・ブラックモアも大きく関与していた。ブラックモアの設立趣旨を述べる文章には、彼女の日本女性たちへの教育にかける切実な願いが込められている。彼女の願いはさらに東洋英和の中で熟成し、遠く70年後の東洋英和女学院大学設立にもつながっているように思われる。

④デビッドソン・マクドナルド医学博士伝

日本にカナダ・メソジスト教会から初めて派遣されたマクドナルド博士は日本のメソジスト教会の黎明期を支えた人物であるが、初期の東洋英和女学校においても、助言者としてまた校医として欠かせない方だった。この方の生涯が語られている。

⑤季節のご挨拶（「カナダ合同教会会報紙より」）

太平洋戦争のために帰国せざるを得なかった宣教師たちがクリスマスの挨拶を交わしている会報紙である。60名以上の方がたのメッセージに共通の思いはアウターブリッジ宣教師による次の言葉であろうか。

「日本ミッションの仲間の皆様に温かなクリスマスの挨拶を送ります。クリスマスの喜びと平和が国々の間で、すべての人たちの間で現実となるようにという心からの希望と祈りで皆様と結ばれています」（p.169）

そして平和を来たらせるために一人ひとりが何とか自分のできることに励んでいることがわかり胸を打たれる。個人的には、この資料集の中で最も好きな箇所である。それぞれのメッセージもさることながら、その方の経歴や関わった地域、学校、そして戦時中何をなさっていたかを調べると驚くほど豊かな事績が浮かび上がってきたので、簡単な人物紹介を一緒に読めるように組み込むことにした。日本ミッションの人びとがいかにさまざまな形で日本人、日系カナダ人のために尽くしてくださっていたかがここに凝縮されている。

第Ⅱ章⑥東洋英和女学院資料集　第１号（翻訳）

かつて刊行された英文の『第１号』の翻訳である。かつて「敬和会」誌に五味澄子氏による翻訳が掲載されたものに、その後判明した事実と翻訳の再検討を加えて収録した。

ミス・カートメルが本国に書き送った報告や、バイブルウーマン養成のための規則、愛用の聖書への書き込みからは、彼女が伝道と教育に精魂を傾けていた様子が生き生きと伝わってくる。

「聖書の中の小さいカードにはミス・カートメルの筆跡で次のものがある。

信仰をもって仕事をしなさい―
崇高な仕事で必ず成功すると信じて
あなたの毎日の生活に起きることを
平凡だとかとるに足らぬとか考えずに
あなたの最もつまらない仕事でも
それを行うあなたの精神で高めなさい
偉大な善なる生活を目指して
できるだけ向上しなさい。そうすれば―
『より深遠な魂の潮の満ち引きがわれわれの
最も内なる存在へと流れ込み
無知なるわれわれをすべてのつまらぬ心配事
から救い上げてくれる』　ロングフェロー」
（p.257）

なお、カートメル愛用の聖書には他にも書き込みが無数にあるので、書き込みのデータ化を行っていき、今後のカートメル研究に道をつけておく予定である。

第Ⅲ章⑦随想―M. J. カートメル　（３編）

ミス・カートメルについて書かれ従来よく創立記念日礼拝等で引用されたミス・シンプソンによる伝記風の読み物と今回初出の他の２編には、いくつか史実と異なる思い違いがみられる。けれども合わせて読むと、重複して記述されるカートメルの日本伝道と帰国後の活動などを通して、彼女の人物像が浮かび上がってくるように思われる。

付録はこの資料集がより活用されるために苦心して編集した箇所である。

⑧リスト（Ⅰ・Ⅱ章の資料の書誌情報）

収録した資料の詳細な書誌情報である。文書タイトル、概要などを一覧できる。

⑨人名索引・人物写真

人名索引は、方々に名前の出てくる人物を包括して知りたい時や、前の方に脚注が出た人物を後から調べたい時に利用していただきたい。これにより、『資料集』の利用価値が格段に高まったと思う。またできるだけ多くの登場人物たちの顔写真を集めた。写真を眺めていると彼らの肉声が聞こえてくるように思える。

人物写真　M. J. カートメルの近親者たち

⑩婦人ミッション関連概略年表

カナダ・メソジスト教会は合同を繰り返して現在「カナダ合同教会」となっている。その歴史の中に位置づけられる婦人ミッションを正しく理解するために最小限必要な事項の年表である。カナダ史や東洋英和の歴史に重ねていただけると、重層的な理解が得られる材料である。

終わりに

資料集作成のために、30名余りの英和関係者の頭脳と手を煩わした。当初から翻訳を何編もしてくださった大井真理子氏と露木美奈子先生、すべての翻訳チェックをしてくださった松田昭彦先生、ネイティブ・チェックおよび研究者の立場から助言してくださったスィッペル本学特任教授に特に感謝申し上げたい。

手伝っていただく過程でボランティアの方たちからは、「こんな歴史が母校にあったとは初めて知りました」との感想が多く聞かれた。「麻布の学校」が創立されて以降、卒業生が家庭においても社会においても良き働きをなし、人びとに「良い学校」として認められるようになるためには、長年にわたる宣教師たち、カナダの人びとの思いと支援、そして続く日本人教師たちと卒業生の努力があったことを、資料を読むことによって今更ながら知るものである。

この資料集が英和の歩みを知りたい在校生や卒業生のために、今後の年史編纂のために、また日加交流史、キリスト教教育史、女子教育史の研究のために大いに活用されてほしい。日本で紹介されていない関係資料はまだまだ眠っている。今後自校史研究の一環ともなる宣教師研究が、学院の歴史研究とともに英和関係者の間で地道に続けられていってほしいと願っている。

（史料室　嘱託）

『東洋英和女学院資料集』販売のご案内

『第４号』（301頁）2,000円+200円（送料）
『第５号』（335頁）1,500円+200円（送料）
お申し込み及び直接購入は史料室（本部・大学院棟）にて承ります。詳細はhttp://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/をご参照ください。

〈思い出の先生がた〉33　加藤信子先生

英和とともに

伯母、加藤信子は、両親ともクリスチャン、伝道者の家庭に生まれました。母親の千代は宣教師たちに日本語を教えていましたため宣教師の方々が時々遊びにみえることもありました。大家族で賑やかな楽しい家庭でした。一番上の姉美智子（校主・設立者平岩愃保の二男馨邦の妻）は、1917年から11年間英和のピアノ科の教師をしており、妹の照子は英和の卒業生です。

笈田ピアノ塾での勉強を経て信子が英和のピアノ科に就職したのは1933年。戦争中を除き、1982年３月まで勤めました。特に戦後からは主任を長く担い、現在のピアノ科の基礎を作り上げました。私たちには、「英和の」ピアノ科だということを忘れないこと、どの生徒も皆神さまの大切な子どもであることを覚えて接すること等々、多くを教えてくれました。一方、学内の色々な行事にも関わり、特別な礼拝のオルガン、修養会や夏期学校、修学旅行などでピアノ科以外の生徒さんたちとも交わる機会を与えられました。幼稚園では、先生方のピアノのレッスンやお泊りキャンプでもお役目をいただいておりました。

教会生活も熱心で、生涯を通して神さまと共に歩みました。教会学校の教師、教会役員など色々なご奉仕を長く続けましたが、特に教会オルガニストとしては女学生のころから102歳になるまで、104年の生涯のうち90年近く務めることができました。

英和退職後はホームレッスンを続けながら、国内外の旅行や手芸を楽しんだり、まだ幼かった私の子どもたちの面倒をみるなど大活躍を続けました。

だんだん歳をとっても衰えを覚えず、肺炎になっても骨折しても必ず復帰するほど。

「わたしももうおばあさんになってきたねー。」と言ったのは90歳過ぎてからでした。

英和が大好きで、昔の生徒さんや仲良しだった先生方のことをよく覚えていて、折に触れ話してくれました。

加藤信子先生

私は今ピアノ教師として、信子が作り上げたピアノの会「わかば会」を引き継いでいますが、信子がまだ若いころの生徒さんである加藤裕子さん（1940年高女科卒　旧姓松本）は、ここ数年毎年発表会に出演してみごとな演奏を披露してくださっています。この原稿を書くにあたり、裕子さんが文章をお寄せくださいましたので、一部紹介させていただきます。

「信子先生とお呼びするだけで感謝となつかしさに充たされます。先生は和服をきちんと召され何時も柔らかな表情で居られました。先生はほんとうに御熱心に細かく御指導下さいました。

私は還暦を迎えたころ、人生の折り返し地点、老いに向う道程、何か始めなければと考えました。思案の末、怠けながらも５歳から続けて来られたピアノ、そうピアノしかないと思い付きました。私のピアノの原点は英和のピアノ科、信子先生です。　　―― 加藤裕子」

文・茂木　恵（中高部卒・元ピアノ科主任）

加藤 信子（かとう のぶこ）先生

―略　歴―

1908年　12月８日（現在の）港区青山に生まれる
1926年　東京府立第三高等女学校卒業
1930年　笈田ピアノ塾入塾
1931年　玉成学園ピアノ科講師（～1933年）
1933年　東洋英和女学校ピアノ科に就任
1946年　ピアノ科（幼・小・中高）主任（～1979年３月）
1982年　東洋英和女学院退職
2013年　５月15日　永眠（享年　104歳）

史料室の活動より（2016年10月～2017年３月）

（☆は複数回の事項）

10月１日：追悼記念日礼拝
・展示替え―「ヴォーリズと英和」終了、「旧ハミルトン＆ハード軽井沢コテージ」開始　10月１日～2017年３月31日
・『赤毛のアン』（原書と翻訳書）撮影―2017年度中学部入学案内掲載のため
・画像提供―村岡花子に関する発表のため、山梨県立都留高等学校へ　片山廣子など３点（追加）
・来訪・展示見学―旧ハミルトン＆ハード軽井沢コテージ　オーナー夫妻、一粒社ヴォーリズ建築事務所スタッフ
・来室・調査―小学部栄養士　創立記念週間の特別献立作成のため、昔の給食献立、写真、『青楓寮』閲覧
・来室―総務課職員　『楓園』特集記事のため、「敬神奉仕」関連の画像検索　→画像提供、照会―大学７号館にある「敬神奉仕」の額の揮毫者　→落款から浜崎次郎牧師と判明
・（15日―「村岡花子記念講座」第１回）
・来室・見学―青山学院資料センター　スタッフ２名
・照会―満沢女史が麻布の女学校で教えていたか？末永らい太郎・砂子夫妻研究者より→不明
・来室―モンゴメリ研究者Ｋ氏と村岡恵理氏　Ｋ氏所蔵写真を拝見する
・29日―「村岡花子記念講座」第２回「史料室所蔵資料にみる女学生の日常」（酒井）

11月・来室―村岡美枝氏　日本女子大学での講演のため、広岡浅子と村岡花子関連資料閲覧　２回
・「史料室だより」No.87発行
・８日―墓前礼拝にて感話（酒井）
・来室・相談―FBIコミュニケーションズ「Kaede Magazine」ビジュアル歴史館資料探し
☆来室―卒業生Ｍ氏　WMSのAnnual Reportを大学院図書室で閲覧（頻回）
・資料提供―創立25周年に寄せたストラチャン夫人とロス夫人の祝辞。高３、12月最後の英語授業教材として。
・（19日―「村岡花子記念講座」第３回）
・展示解説―毎日新聞旅行主催「TOKYO大学博物館散歩」約20名
・出張―「女性情報アーキビスト養成研修」、「ララ70周年記念フォーラム」参加

12月・校閲―2017年度中学部入学案内　歴史の部分
・校閲―「Kaede Magazine」ビジュアル歴史館
・画像提供―高校英語教科書「Revised Element English Communication Ⅰ」指導資料のため、YHB編集企画へ　展示コーナーの画像　１点
・来室・調査―筑波大学准教授　戦前の朝鮮からの留学生について 大学院図書室にて「同窓会会報」全巻閲覧（４日間）
・来室・閲覧―Ｙ氏（1971年短大卒）　1968年増築の短大校舎に関する記事と写真
・画像提供―NHKBS「ザ・プロファイラー柳原白蓮」のためアマゾンラテルナへ　永坂孤女院など６点
・来室・検索・画像提供―「麻布地区『港区政70周年・総合支所制度10周年』記念イベント」のため　J-リポートへ、ヴォーリズ校舎、周辺写真など
・照会―管財課より　東鳥居坂町８番地から六本木５丁目14番40に住所変更した時の書類はあるか　→1967（昭和42）年７月の書類提供
・来室―大学教員　生涯学習センター講座のため資料閲覧、画像提供―1900年の校舎の寄宿舎生活など８点
・来室・懇談―大学教員　英和の英語教育について
・取材―「ザ・AZABU」（No.39　３月刊）＜大人の社会科見学＞欄のため、学院資料・村岡花子文庫展示コーナーについて
・照会―卒業生の加茂さく氏について　孫のＭ氏より　→1903年卒業　1905年４月より１年間教員兼事務員を務める。
・打ち合わせ―村岡美枝・恵理氏と。次回展示内容について

2017年
１月・来訪・展示見学―Ｙ氏(ヴォーリズ研究者)
・画像提供―「村岡花子記念講座　第５回」のため　村岡恵理氏へ　ミス・ブラックモアなど５点
・画像提供―「村岡花子記念講座　第４回」のため　池田明史学長へ　小野徳三郎、卒業生の軍人夫妻画像
・来室―Ｋ氏（1965年卒）「ミス・カートメルの手帖」読み起こしと翻訳を依頼
・（21日―「村岡花子記念講座」第４回）

・来室―北陸学院大学講師と大学教員　戦前・戦時期の保育日誌閲覧
・中高部地歴部ボランティア11名―クラブ関係しおり等の分類・整理など作業協力
・第３回史料室委員会
・(28日―「村岡花子記念講座」第５回)

２月・展示替え―「村岡花子記念講座」終了、「宣教師と村岡花子②　ミス・ブラックモア」開始　２月１日～2017年９月22日
・画像提供―「月刊おとなりさん」掲載のため、ハーツ＆マインズへ片山廣子１点
・画像提供―「多摩美術大学芸術人類学研究所紀要」掲載のため、片山廣子１点
・画像提供―『カナダの歴史を知るための50章』掲載のため、明石書店へ　1885年ミス・カートメルと生徒　１点
・来訪―S氏（1989年卒）　おばあ様（1933年卒）の生徒の時の作文を閲覧
・来訪・展示見学―F氏　母上（1933年卒）の回想をうかがう
・展示解説・講義―「楓33」グループへ「史料室のはたらき」
・来室―中高部理科助手　現校舎理科室設計図移管、古い植物標本の保存のため保存材料提供
・「麻布未来写真館」第Ⅱ期パネル展開催　２月28日～３月24日
・来室・閲覧―北陸学院大学講師　戦前の保育日誌（２日間）

３月・来室・調査―小学部教員　授業のため→画像提供　戦時下の英和　約10点
・来室・調査―立命館大学院生　戦前の避暑地の形成への宣教師の関与について
・来室・調査―日本学術振興会研究員　日本の禁酒運動について
・『東洋英和女学院資料集第５号』刊行
・来室・調査―中高部　教員　中高部の過去のスキー教室開催年度　→しおり、「楓」「東洋英和新聞」「東洋英和ニュース」「中高部年間行事予定表」閲覧
・展示替え―「旧ハミルトン＆ハード軽井沢コテージ」終了

史料室所蔵資料の目録化作業経過報告

逐次刊行物の目録作成（同窓会会報、東洋英和新聞などは終了）、資料の概要目録作成（おもに準貴重資料と中高部関係一部）

おもな寄贈資料

＊『話すための英語力』講談社現代新書　ほか　鳥飼玖美子（高等部卒）著　他著作多数
＊『グリム童話と森』森　涼子（高等部卒）築地書館
＊『ありふれたこと』クリスティーナ・ロセッティ著　橘川寿子（高等部卒）訳　渓水社
＊『朝河貫一と日欧中世史研究』海老澤衷他編　吉川弘文館、山内晴子（高等部卒）論文所収
＊『現代フランス広文典　改訂版』目黒士門（元大学名誉教授）著　白水社
＊『みちのくの道の先　タマシン・アレンの生涯』目黒安子著　教文館
＊『時のほとりで』前田遊（利律子　高等部卒）
＊泉 和子氏（高等部卒）遺品他　岩田有紀子氏（高等部卒）より３世代の在校時の資料多数
その他　他大学年史・紀要多数

購入資料

＊『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版　他

製作資料

＊マイクロフィルムのデジタル化：カナダ合同教会関係資料（関西学院 学院史編纂室より借用したもの）
＊『赤毛のアン』翻訳自筆原稿の画像デジタル化
＊ヴォーリズ校舎設計図のデータ化
＊『東洋英和女学院資料集　第５号』刊行

＜お知らせ＞
＊学院資料・村岡花子文庫展示コーナー
現在開催中の企画展
「宣教師と村岡花子②-ミス・ブラックモア」
２月16日～９月22日　（４月より拡大）
＊「史料室だより」は全号 学院ホームページで閲覧できるようになりました。
URL：http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/
＊史料室では学院の歴史や学生生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがありましたら、ご寄贈いただけると幸いです。また、卒業生および教員の著作も収集しています。

【お問い合せ先】
東洋英和女学院史料室（法人事務局内）
Tel.03-3583-3166（直）Fax.03-3583-3329
E-mail：archive@toyoeiwa.ac.jp